

毛利文香さん(ヴァイオリン)応援レポート

シャネル・ピグマリオン・デイズ2017

2017年6月17日(土) 14:00開演

シャネル・ネクサス・ホール

「ピグマリオン」という言葉は、ギリシャ神話に語源を持ち、才能を信じ、支援して開花させるという意味がある。「シャネル・ピグマリオン・デイズ」は、このスピリットに基づき、シャネル・ネクサス・ホールで若手のアーティストに演奏する機会を提供するプログラム。2017年はバイオリニスト1名、チェリスト1名、ピアニスト2名、ソプラノ1名を支援している。

この日は、2017年のアーティストに選ばれた毛利文香さんの今年3回目のコンサート。このホールでの演奏会は、アーティストとの距離が近く、弓の運びや弦の上を滑る左手の指の動きが手に取るようにわかる。曲の合間にはアーティストによるトークもあり、アーティストの人柄、個性を垣間見ることができる。広いホールのコンサートももちろん素晴らしいが、このようなスタイルの演奏会はアーティストやその演奏に身近に触れられ、また違った楽しみ方ができる。

小さい時から、コンクールに出場する際や演奏会で、いつもピアノを弾いてくださっている田中麻紀先生との息の合った共演。ヴァイオリンとピアノの掛け合いが聴衆を楽しませた。

ピアノシモの繊細な音色、重音の太い響き、低音の深い音色、高音の透き通った音色。バイオリンならではの様々な音色をたっぷり堪能した。ピアノシモの長い音とたくさんの重音。高い技術が無いと美しく弾けない難曲と思われた。

当日弾いた2曲共に演奏会で初めて演奏する曲、という意欲的なプログラム。それでも2曲とも表現力たっぷりに弾き切った。相当の勉強と準備をされたことが伺われた。トークの間、また下のQ&Aでも「勉強」という言葉を何度も使った毛利さん。音楽に対する好奇心と探究心、決して満足せず、繰り返し演奏し、高みを目指す。まじめな毛利さんの一面が見えた。

レポートリーも広がり、また一段階段を登ったのだろう。いろいろな経験を積んで、多くのものを吸収し、演奏家としての幅も広がり、どんどん活躍の場を広げている毛利さん。大きく羽ばたく毛利さんを応援したい。

2017. 6. 17
CHANEL Pygmalion Days
PROGRAM

毛利 文香 (ヴァイオリン)
田中 麻紀 (ピアノ)

ベートーヴェン
ヴァイオリン・ソナタ 第4番 イ短調 作品23

Beethoven
Violin Sonata No. 4 in A minor, Op. 23

I. Presto
II. Andante scherzoso, più allegretto
III. Allegro molto

— 休憩 —

シューベルト
ヴァイオリンとピアノのための幻想曲 ハ長調 D934

Schubert
Fantasy for Violin and Piano in C Major, D934

アンコール曲：
シューベルト 「水の上で歌う」 D774

今日のプログラム、演奏についてご本人に直接お聞きしたところ、
興味深い回答をいただきました。
音楽に対する前向きで、まじめな姿勢がひしひしと伝わってきます。必読！！

Q1. 今日はどんな演奏をしたいと思って臨まれましたか？今日の演奏はいかがでしたか？

A. 作品の深さや緻密さをお客様に感じて楽しんでいただけるような演奏をしたいと思っていました。シューベルトの幻想曲はそれを少し達成できたような気がします。ベートーヴェンの4番はそのコンパクトさの中でもっと内容を充実させていくことがこれからの課題かなと思っています。

Q2. 作曲者にはもちろん個性があると思いますが、好きな作曲者は誰ですか？ドイツに留学していらっしゃる毛利さんにとって、ベートーヴェンはどんな作曲家ですか？

A. 好きな作曲家、また作品はたくさんありますが、やはりベートーヴェンやブラームスなど、ドイツの作曲家が特に好きです。ベートーヴェンは、古典派ながらも、ロマンティックさや様々な感情がその奥にこめられていて、勉強すればするほどその表現方法をますます研究しなければという気持ちが強くなります。



毛利 文香
Fumika Mohri
Violin

2012年第8回ソウル国際音楽コンクールにて日本人として初めて最年少で優勝。2015年第54回バガニーニ国際ヴァイオリンコンクール第2位、エリザベート王妃国際音楽コンクール第6位、川崎市アゼリア舞賞、横浜文化賞文化・芸術奨励賞、京都・青山音楽賞新人賞受賞。
これまでに、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、大阪交響楽団、韓国交響楽団、ベルギー国立管弦楽団等、国内外のオーケストラと多数共演。また、宮崎国際音楽祭、武生国際音楽祭、イタリア チェルボ国際音楽祭等に出演。
2016年3月には、紀尾井ホールにてデビューリサイタルを行った。
グライネンを田尻かほり、水野佑加香、原田幸一郎の各氏に師事。
桐朋学園大学音楽学部ソリスト・ディプロマ・コース、及び洗足学園音楽大学アンサンブルアカデミー修了。現在、慶應義塾大学文学部在学中。2015年9月より、ドイツ クロンベルクアカデミーに留学し、ミハエラ マーティン氏に師事。第45回江副記念財団奨学生。



Q3. 財団へのレポートに、今回はとても美しい難曲、シューベルトのファンタジーに挑戦するとありましたが、今回はどういった理由でこの曲を選ばれたのですか？

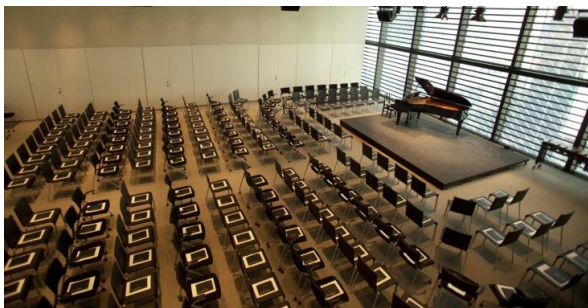
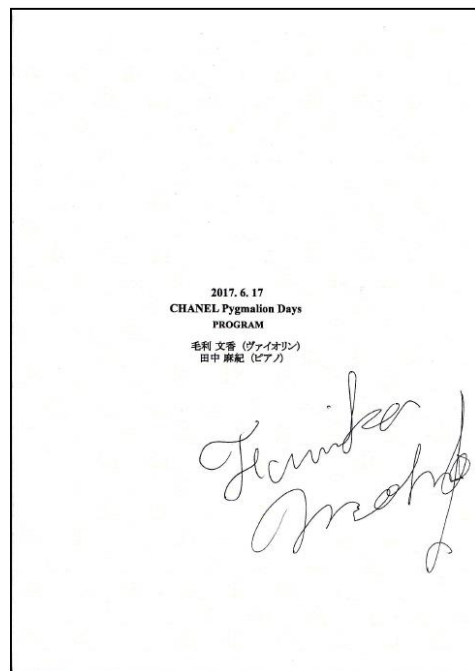
シューベルトの幻想曲は以前から興味がありながらもなかなか勉強する機会がなかったのですが、実は今年9月の武生国際音楽祭にてこの作品を演奏する機会をいただき、是非その前に一度舞台上で演奏したいと思い、今回のプログラムに入れました。

Q4. 今日は2曲共初めて演奏する曲ということでしたが、準備はいかがでしたか？

レッスンやマスタークラスでアドバイスをいただきながら、本番の直前になってようやく曲全体のイメージがまとまってきた感じでした。どちらも長く弾いていきたいレパートリーなので、ますます深めていきたいです。

Q5. クロンベルグ・アカデミーでかけがえのない貴重な経験を積んでいらっしゃると思いますが、その中でも一番大きな収穫はどんな点ですか？またご自分の演奏にどんな変化が生まれていると思っ

ていますか？
一番の収穫は、自分の師匠(ミハエラ・マーティン先生)からの教えです。師匠のもとで学び始めてから、技術的なことで直したこともありますし、音作りへのこだわりや表現のイメージがより強まったと思います。そして、世界中から集まる同年代の素晴らしい仲間との出会いもこの留学での大きな収穫の一つです。



Q6. 今日の演奏を今後にどのように活かしていきたいですか？

ベートーヴェンは、今後のシャネルのプログラムにも入れていきますし、シューベルトのファンタジーは9月の武生で再び演奏するので、今回の反省をふまえてより充実した内容にしていきたいですし、また少し時間を空けることで、新しい気持ちで再び向き合ってみたいです。

Q7. どんなバイオリニストを目指していらっしゃいますか？

自分の音をしっかり持ち、お客様に「また聴きたい！」と思っていただけるような音楽家になりたいです。



演奏後の満足そうな毛利さん。笑顔で応じてくださいました。

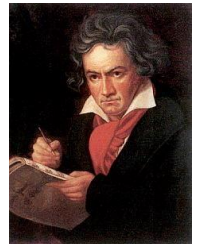
豆知識

ベートーベンとシューベルトが重なった一瞬

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベン

(1770年12月17日－1827年3月26日) 国籍・ドイツ 古典派

1792年、21歳のベートーベンは、演奏家として既に名を馳せていたものの、作曲の勉強を更に続けるためにハイdnに師事。しかし十分な指導が受けられず、93年頃からサリエル等に師事。30歳頃になると耳の疾患を抱え、自殺まで考える。作風はこれを境に変化していき、主観的で情動的な深い作品を次々に作曲していく。耳の病が進行していく中で、それでも苦難の中からいくつもの傑作を生んだ。40歳頃には全く耳が聞こえなくなり、一時作曲が停滞したが、52歳になったベートーヴェンは奇跡の復活を果し、「交響曲第九番」を世に出した。ベートーヴェンは病床の身の中でシューベルトの歌曲を知り、「この作曲家は素晴らしい。今に大成するだろう。」と言ったという。



フランツ・ペーター・シューベルト

(1797年1月31日－1828年11月19日) 国籍:オーストリア ロマン派



シューベルトは31年という短い生涯の中で、600以上の歌曲を書き、「歌曲の王」と称されるほど歌曲の名作を多く残した。『美しき水車屋の娘』『冬の旅』『白鳥の歌』は、シューベルトの3大歌曲と呼ばれる。

生涯貧しい生活を送っていたが、ベートーベンの演奏会には必ず聴きに行ったという。シューベルト25歳の時、ベートーベンの「交響曲第九番」を聴き、その圧倒的スケールと内容に「この交響曲の後にどんな作曲が出来るだろうか。」と第2楽章まで出来ていた自身の交響曲の続きを断念してしまう。それが死後30年後に発見された「未完成交響曲」と言われている。ついにシューベルトは偉大な先輩と言葉を交わすこともないままに、ベートーベンの死の数日前、死に直面した巨匠の病室にじっと立ちすくんでいたが、盛大な葬儀にはその棺を囲んで進む集団の一人となっていた。

「俺はベートーヴェンのようにになりたいんだ。」常に友人たちに語っていたシューベルトはベートーベンが亡くなった次の年、31歳の若さで亡くなった。友人たちは、せめて天国でベートーヴェンの側にいられるようにと、その墓をベートーヴェンの隣に造った。

(決定版!!「クラシック作曲家ファイル」中島克麿 株式会社ドレミ楽譜出版社、およびインターネットより)



ウィーン中央墓地 (左・ベートーヴェン、中・モーツァルト、右・シューベルト)